

2章 探究活動の実践・解説（附属天王寺中学校）

2-2-1 自由研究を核としたカリキュラムマネジメント（附属天王寺中学校）

廣瀬 明浩（附属天王寺中学校）

自由研究実践の歴史

自由研究の普遍的意義

附属天王寺中学校で自由研究の学習指導が始まったのは、本校が開校した昭和 22 年（1947 年）度である。当初は英語と同じく選択教科として位置づけられていた。戦後の混乱期にあって我が国の教育の進むべき方向が五里霧中であった時代に、附属天王寺中学校を創設した教員たちは「自分で考え行動し、その結果として得られた知見を自分の言葉で伝えること」に大いなる意義を見出していたことがわかる。その後、昭和 24 年（1949 年）度の特別教育活動（特活）の設定とともに自由研究は特活の活動内容となり、「自由研究」の名称は一旦廃止された。名称は廃止されたものの、夏休みの課題として自由研究は存続し続け、あとに示すカリキュラムの変更を経ながら今日に至っている。

自由研究が70年以上の長期にわたって継続されてきたのは、学習指導における普遍的な意義が存在するからである。すなわち、①問題を見出し、研究テーマを決定し、自分で企画し、研究することによって、計画性・継続性・創造性を養うことと、②自分の研究成果を発表したり、他の発表を聞いたりすることによって、発表の技術と発表を聞く態度を向上させることである。

発表形態の変遷

生徒による口頭発表は、自由研究開始年度から実施されてきた。発表を聞くことによる相互啓発が主たる目的であるが、保護者による学校理解の促進および深化も重要視していることは現在も変わらない。

昭和 39 年度までは、各学年における学級代表者による発表を経て学年代表者による学校全体発表会を開催していた。昭和 40 年度からは、11 月に開催される学芸会で各学級による劇発表のあとに全体発表会を開催するようになった。その後、学級増により学芸会での全体発表会の開催が時間的に不可能になったため、昭和 49 年度には自由研究発表会を学芸会とは分離して開催した。しかしこの間に各種の行事が追加して実施されるようになったため、発表会の規模を縮小したり中止したりする代わりに、冊子「自由研究」を昭和 51 年（1977 年）度に創刊した。

その後、冊子「自由研究」の発刊は現在に至るまで継続しており、併せてゼミ単位の間接発表会が 8 月 10 日頃に、学級発表会が夏休み明け直後にそれぞれ行われている。さらに学級ごとに優れた口頭発表を選出し、学級代表者による「自由研究学年発表会」を 10 月中旬に開催している。自由研究学年発表会は、限定的ではあるものの一般公開を行っており、本校の広報的な位置づけにもなっている。

育てたい生徒像と成果

地区テーマとスクールポリシー

各附属学校園にあっては、それぞれ地区ごとにテーマを設定して学校運営に取り組んでいる。天王寺地区では「人間と科学の調和を拓くりテラシー教育」をテーマに据え、物事に対する知的好奇心を基礎に、科学的・論理的な知識や技能を活用し、課題の発見や解決への道を体験的な学びを通して開拓していくリテラシーの育成をめざしている。

この地区テーマを基盤として、令和 2 年度にスクールポリシーが策定された。その中のグラデュエーションポリシーでは、天王寺中学校が育てたい生徒像として、①リーダー的素養すなわち、対話的・協働的に企画し実行しやりぬく力を有した生徒 ②イノベーション主導力の基礎となる力すなわち、多様な疑問を感じて新たな課題を見出す力を有した生徒 の 2 点を示している。これら 2 つの生徒像は、天王寺地区の特色である中高の一貫性を活かし、STEAM 教育を実践しながら育成されるべきものである。

さらにカリキュラムポリシーにおいては、①実体験を重視する学習を通して各教科の基礎・基本を徹底するとともに生徒の学習習慣を確立させ、自ら学び続けるための自己評価を活かしたカリキュラムを開発すること ②教科内探究活動からさらに進んだ STEAM 教育として、自由研究に代表されるような、教科の学力を活用した教科横断的探究学習を実践しイノベーション主導力を育成

すること を示し、自由研究の学習活動を本校における学習活動の基幹とするとともにさらに継続・発展させることを示している。

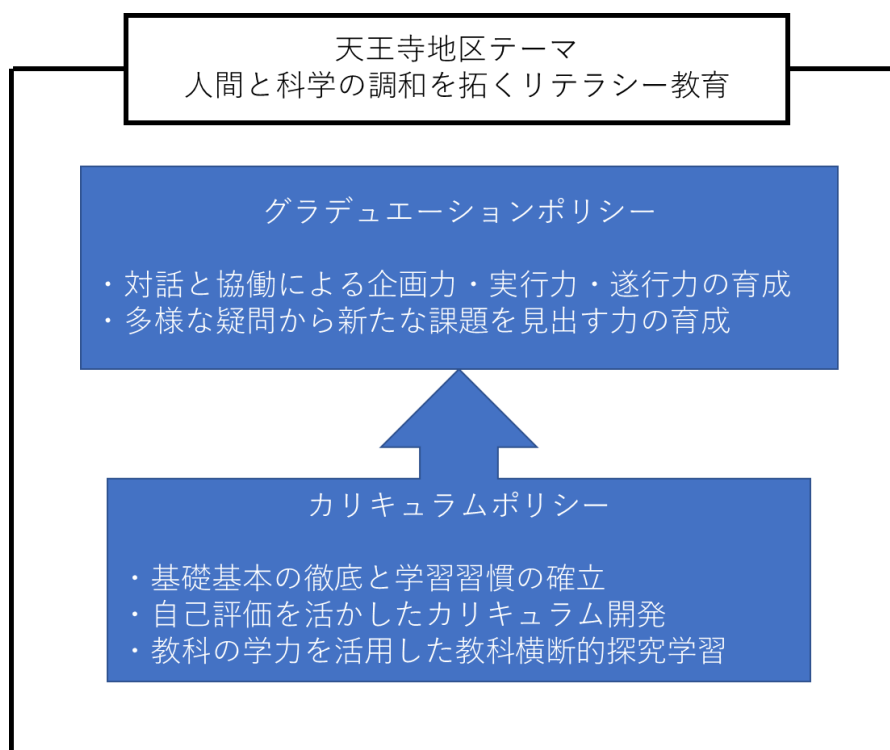


図 2-2 天王寺地区テーマと附属天王寺中学校スクールポリシーの関連

自由研究に取り組んだ生徒の意識

3年間の「自由研究」の取組を終えた生徒へのアンケートから、学びの深まりに関する生徒の自己評価の実態についてまとめた。アンケートは、令和2年度に冊子代表として選出された3年生(72期生)から数名を対象として実施した。質問項目を、①3年間の自由研究の取組を通して学んだこと ②本校が自由研究の取組をなぜ大切にしている理由 とし、いずれの回答も生徒による自由記述である。

生徒の回答から、「自由研究」を行うことによって学んだ共通点を知ることができる。それは、①自分の生活から立ち上がった疑問を主体的に探究し、課題を解決することの大切さと、それに伴う自律的態度の獲得 ②研究内容を、聞き手が納得するように伝えるための論理的表現力の重要性 ③継続的な探究活動によって疑問を解明する面白さと課題解決能力に関する自覚 ④協働的活動に関する重要性の自覚 などである。以下に生徒の回答例を示す。

【生徒 A】

①自分が知りたいテーマを知るためには、自らが動かなければならないと感じた。また、そのためには、明確な目的意識を持つことが大切だと知った。今後、自分が叶えたいことや成し遂げたいことのためには、漠然と生活していくのではなく、その夢のために計画を立て、自分が今すべきことを続けるべきだと知った。

研究テーマを探る中、自分は何に興味があり、何を知っていて、知らないのか、自分に向き合うことができた。何をしたいのか明確な目標を持ち、目標に向かって、アプローチし続けることの大切さを学んだ。

②自由研究は、他の学習とは違い、明確なゴールが提示されない。テーマ設定も、目標設定も、どれだけ深く研究するか、どれだけ時間をかけるかも、自ら決定することができる自由度が高いこの活動では、いかに自らの意志を強く持ち、目標に向かって自分を引っ張っていけるかが求められる。学校では先生が、家では親が、私たちが引っ張っていつくれるが、社会にでた時、私たちは自ら進む路を決めて努力しないとイケない。自由研究は、その力を伸ばすことができるから。

【生徒 B】

①私が 3 年間の自由研究を通して学んだことは、発表力だ。人前で話す時は緊張してかんでしまうことが多いが、前もって原稿を用意していたりすると、すらすら話すことができた。他の人の発表からもプレゼンの仕方を学ぶことができた。

また、自分の考えや、今興味あることを自分の手で追究し、結果が出なくても過程を発表したり、聞いたりすることで、そこから新しい興味へつながったり疑問が増えた。

②自分で順序立てをし、自分で調査し、自分で研究し、自分でまとめる。全て「自分で」することで研究が始まるので、自主自立につながるから。

【生徒 C】

①疑問に思ったことをインターネットなどを使って簡単に答えを見つけるのではなく、時間をかけて計画性を持って、じっくり答えを探すことの面白さを学んだ。

②自由研究を行うことで、勉強をすることの本質を学ぶことができるし、自主的に進めていく力もつけられるから。

【生徒 D】

①物事に対する知的な好奇心や探究心を学んだ。身の回りにある些細なものでも興味や疑問を抱き、それを自分で紐解いていこうという姿勢が研究において最も大切であると思う。その姿勢は、

普段から考察力を身につけることができ、今後の高校生活で大いに役立つと考える。自由研究は、今後役立つ様々な力を身につけられた自助努力の賜物。

②生徒自ら興味を持っているものから疑問を抱き、自身の力で紐解いていく力を見つけるため。文献調査から自分で研究を行うことで、研究を身近なものに思え、日常生活から好奇心、探究心を持って過ごすことができ、そのような姿勢を大切にしているから。

取り組みのプロセス（工夫ポイント、苦勞した点、乗り越えた方法）

旧カリキュラムの概要と成果

平成 30 年度まで行ってきた旧カリキュラムでは、各学年でテーマを設定し、およそ 5 月初旬から 9 月中旬までをかけて活動に取り組む形式を取っていた。1 年生では、学年や学級担任が中心となり、資料の調べ方や校内および市立図書館等の利用方法、研究ノートの作成方法など基本的な事項を扱った。授業中には、生徒が作成した研究計画書をもとに個人面談を行い、生徒が徐々に主体的に研究活動に取り組めるようにした。夏休みの登校日には、その時点での研究のまとめを報告する中間発表を行うこととした。2 学期が始まった直後に本発表として研究全体のプレゼンテーションを、ポスター発表を主な手段として行った。それらを経て、研究ノートを完成させることが課題となっていた。2 年生では、学年や学級での指導に加え、生徒が仮テーマを設定した段階で、各学年主任、各学年付教員、2 年生の学年教員、学年配属外の教員、養護教諭の指導可能分野を参照し、自由研究係が担当生徒を割り振り、より専門的な指導を行うゼミ形式での活動を行った。1 年次と異なり、各生徒の研究内容に応じた研究手法や分析方法など、さらに詳細な指導を行った。その他の活動は 1 年次とほぼ同様であった。3 年次は、再度、学年と学級担任による指導に戻るが、1・2 年次で学習したことを活用し、ほぼ生徒自身によって研究を進めることとした。

このような旧カリキュラムの成果としては、3 年間で 3 回の研究のサイクルを経験することができるため、繰り返し学習の観点から研究の進め方を身に付けることができるという点が挙げられる。また、例えば 1 年次で納得のいくような研究ができなかったとしても、その反省を生かし、2 年次や 3 年次でより大きな成果や学びを得ることができるという成功体験に結び付けやすいということも想定していた。

新カリキュラムへの移行の背景

旧カリキュラムにおいても、教科横断型の探究学習であり、生徒の主体性を伸ばすようなカリキュラムとなっていたが、課題も多かった。

前述の成果について、1年次で基本を学び、2年次で専門的に学び、3年次で主体的に研究を行うというステップを踏むということではあるが、成果物としてはゼミ担当教員から専門的な指導が受けられる2年次のものが最も質が高くなる傾向にあった。適切に学びを生かすことができた生徒については、3年次での研究活動は大きな達成感を得られるものになったと考えられるが、3年次では生徒の主体性に任される部分が大きくなるがゆえに、研究としての質に差が見られ、自分が行った研究という意味では成功体験を得られた生徒は限定的であったと思われる。

さらに、2年次のゼミ活動においても、当該年度の教員の配置によっては、必ずしも生徒のテーマに近いゼミに入ることができるとは限らなかった。例えば、体育科の教員のゼミに配属することが適切であると思われるテーマであっても、各学年主任、各学年付教員、2年生の学年教員、学年配属外の教員、養護教諭の中に体育科の教員やその分野を指導できる教員がいなければ、専門外の教員が担当せざるを得ず、専門的な指導を受ける機会を失う可能性が低くはなかった。

また、この限られた教員数で、かつ指導可能分野が不均衡となる可能性がある中では、ゼミに配属される生徒数にばらつきがあり、自由研究に関わる教員全体として見たときに、指導にあたるための負担に大きな差が生じていた。2年生の生徒にとっても、人数が多いゼミに配属になった場合には、個別指導を受けられる時間がその分少なくなってしまうていた。

学習のカリキュラムについては、3年間で3回の研究サイクルを経験できるという利点を挙げたが、3年間で指導する内容については、各学年や各教員に委ねられる比重が大きかったため、特に転勤などが多い年度であれば、指導内容の引き継ぎが不十分になる場合があり、3年間で系統立てた指導が困難になることがあった。全体を統括する自由研究の主担としても、このような学年裁量の大きな活動であるために、実際の指導の詳細について把握したり、総括したりすることは容易ではなかった。

生徒の視点からも、およそ5月初旬から9月中旬までが自由研究の活動期間であったため、短期間で、しかも夏の間にできる研究をテーマにする必要があり、テーマ設定における制約があったことから、テーマ設定に悩む生徒も少なくなかった。協働的に学ぶという観点からは、同学年の

生徒と意見交流をする機会はあるけれども、異学年の生徒と何らかの接点を持つことはなく、知見の広がりとしては必ずしも十分ではなかった。

このように、様々な角度から旧カリキュラムを評価したときに、改善点が見つかり、新カリキュラムの提案と実施に移ることとなった。

新カリキュラム開発の視点

これらの課題の改善を中心に、新カリキュラムを開発し、令和元年度から開始した。全体像として、3年間で3つの研究を行うのではなく、3年間で1つの研究を深める活動となるように変更した。これに伴い、全学年の生徒がゼミに配属する形となり、学年や学級担任に加え、ゼミ教員から専門的な指導を受けられるようにした。全教員が全学年の生徒を指導することを基本とし、生徒の配属をテーマの分野だけでなく、研究計画段階の研究手法などにも着目して行うことで、教員間で担当する生徒数に意図せずに極端な差が出ないように工夫した。また、全教員がゼミを開講するため、その年度の教員配置による影響は小さくなる。教員の転出や着任があるため、新年度になった段階でその分の調整を行う。

学習のカリキュラムとしても、自由研究の担当が3年間の全体像を示し、各学年で扱う指導内容や指導の流れ等を職員会議だけでなく、各学年主任とも詳細に確認する。各学年主任が担当学年の自由研究係となることで、3年間という長期の活動であっても学習状況を把握し、引き継ぎやすくしている。その状況を自由研究の担当が統括することで、自由研究の活動全体の評価をしやすくし、次年度への改善へつなげることを可能としている。

旧カリキュラムでは、活動期間が短いことでテーマ設定に制約があったが、3年間で1つの研究とすることでテーマ設定に時間をかけることができる他、長期的な研究が可能となった。紆余曲折を経ることが自由研究の醍醐味でもあるため、場合によっては2年次においてもテーマを変更できる余地を残している。

さらに、全学年がゼミに所属するため、異学年での交流ができるようになった。特に1年生にとっては初めての自由研究活動となるため、2年次や3年次にどのような活動になっていくか想像しづらいが、ゼミ内での発表活動等を通じて、上級生の活動内容について知ることができる。

これらの改善に加え、3年間の集大成として、自身の研究を論文の形で執筆することとした。旧カリキュラムにおいては、各学年から優秀な研究を行った生徒のみが執筆していた。また、研究ノートが最終の成果物となっていたが、これについても教員や生徒の中でどの程度の質が最低限求められているのかの共通認識が持ちづらかった。新カリキュラムではノートではなく編集のしやすいファイルを用いて、3年間で積み重ねていく研究ファイルを用いることとした。口頭発表であるプレゼンテーションで得られた他者からのフィードバックや研究ファイルの内容を精査し、丁寧な論理展開を考え、論述することを指導し、3年生全員が論文を提出することで3年間の自由研究活動を締めくくることができた。3年間のカリキュラムの概要図を図2-3に示す。

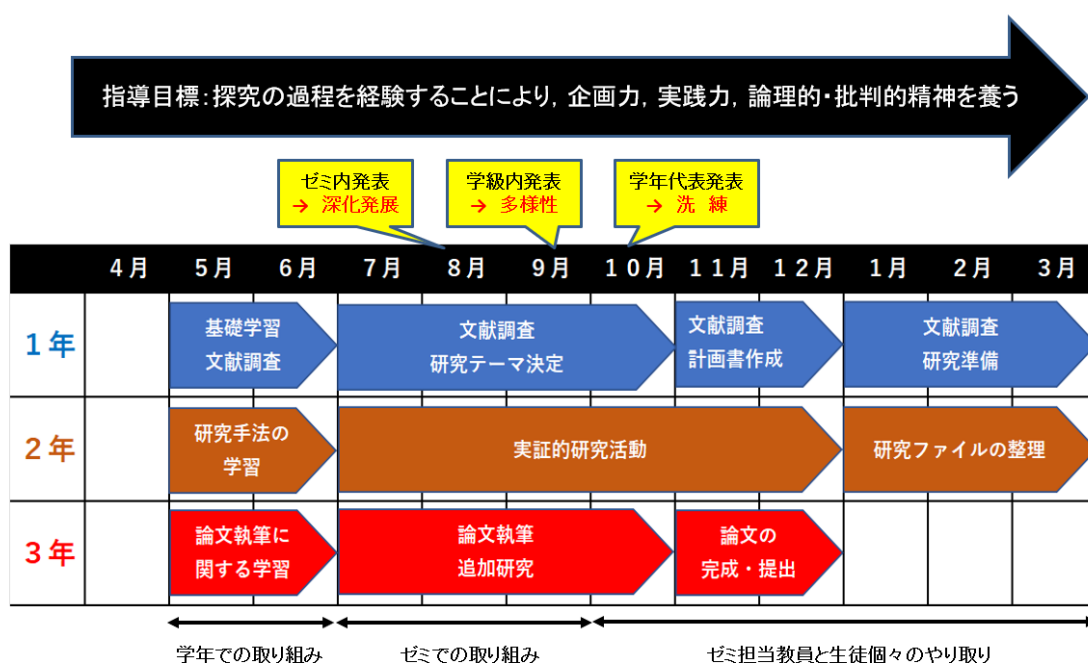


図 2-3 3年間のカリキュラム概要

授業と振り返り

令和4年度の年間指導計画を以下に示す。

	候補日	1年生(76期)	2年生(75期)	3年生(74期)	その他のやること	
1	4月22日(金) 5限 学活	自由研究ガイダンス	研究計画書の見直し	自由研究ガイダンス	ガイダンス実施場所:小講堂など	
	6限 総合	「なぜの発見」 ～自らの興味・関心を探る～	自由研究ガイダンス			
2	5月6日(金) 5限 総合	先輩の自由研究に学ぶ ～質的研究・量的研究とは…～	自由研究ガイダンス ～主に研究の手法について～	研究論文の書き方①		
3	5月13日(金) 6限 総合		研究の手法① ～アンケート調査について～	研究論文の書き方②	1年生:合宿訓練	
	5月20日(金) 5限 総合	図書館実習	研究の手法② ～実験・調査等の実施と結果分析～	研究の共有	1年生が、中央図書館に図書館実習にいけない場合、学校の図書館で実施することもできる。ただし、大学の図書館は利用人数が20名程度と限られており難しい。	
6限 学活	文献調査の方法・体験 (PC実習)	テーマ 決定用紙 6月1日(水) 17時締切	研究の手法③ ～統計処理の仕方について～	研究の共有		
5	6月3日(金) 6限 総合	研究ファイルの作り方 ～文献をまとめよう～	PowerPointとWordの復習	アウトラインの作成	3年生はアウトラインを完成させた生徒から、論文作成に取組む。	
	6月17日(金) 5限 学活	← 所属ゼミの発表、ゼミ指導① →				
6限 総合						
7	6月24日(金) 5限 学活	ゼミ指導②				【ゼミ指導について】 ①1、2年生を中心に指導する。 →1年生は研究計画書の作成、2年生は実証的研究を進めていき、自由研究ファイルに自身の研究についてまとめていくように指導する。 ②3年生は、アウトライン作成を早めに終え、論文作成を自律的に行なう。
6限 総合						
8	7月1日(金) 5限 学活	ゼミ指導③				
6限 総合						
9	7月8日(火) 5限 学活	ゼミ指導④				
6限 総合						
10	7月15日(金) 1～4限	ゼミ指導⑤				※3年生のアウトライン未提出者は必ず1学期中に提出させるように、ゼミ担当教員が責任を持って指導する。
夏休み中、個別指導						夏休み中も、クラスルームなどを用いて、生徒が研究活動を進めているように、ご指導をお願いします。
11	8月10日(水) 1～4限	ゼミ指導⑥				
12	9月9日(金) 1～4限	ゼミ指導⑦				
13	9月14日(水) 1～4限	自由研究発表会(学級)				【3年生】 発表2日目に担任から附高連絡進学に関わる必須提出物「研究論文」の締切日を発表し、指示に従って提出するように指示してもらう。 【1年生】 自由研究のクラスルームから生徒が研究計画書のデータをダウンロードし、研究計画書を完成させる指示を出す。
	9月15日(木) 1～4限					
14	9月16日(金) 6限 総合	研究計画書作成の書き方とまとめ	自由研究のまとめ ～次年度に向けて～	3年間の自由研究のまとめ ～新たな問いへ～	【提出締切】 1年生:研究計画書(クラスルーム) 3年生:研究論文(クラスルーム) ※ゼミ担当教員は、責任を持って研究論文が未完成の生徒の指導を継続して行う。	
15						
16	10月12日(水)	自由研究学年代表発表会				自由研究発表会(学級)より、各学年の代表者を選出する。 スライド・レジュメ:ゼミ担当教員 発表指導:学年教員
17						
18	11月12日(土) 教育研究会	教育関係者への発表				

学年での取組 ← 学年の企画運営

また、各学年の到達目標を次のように設定した。

1年生 テーマ設定 ➡ 研究計画書作成

【指導概要】

生徒が真に興味、関心のある分野からテーマを設定させる。指導は、特に問題提起をするための文献調査に重きを置く。そのために、次のことを指導する。

- 文献調査の方法、体験
- 図書館の使い方、図書館での文献調査
- 論文の分析
- プレゼンテーションソフトの使い方・効果的なデザイン
- 簡単な量的、質的研究の学習

また、テーマ設定後は次年度に向けて研究計画書を作成させる。(年度末には、教員が完成した研究計画書を回収する。)

【目標】

- ① 興味がある分野の文献をできる限り多く読み、得られた情報を組み合わせて問題提起をすること。
- ② 聞き手が発表内容を理解できるプレゼンテーションスライドを作成し、論理的に説明すること。
- ③ 研究テーマを決定し、研究計画書を作成すること。

2年生 実験・調査 ➡ 発表 ➡ 修正

【指導概要】

1年時に完成させた研究計画書をもとに、実験・観察、製作、実態調査、現地調査・見学などを取り入れた実証的な研究活動を行わせる。また、ゼミに所属していることから、集団として研究を高め合っていけるような活動も目指す。

【目標】

- ① 設定したテーマに関する文献をさらに読み、得られた情報を組み合わせて比較・分析を行うこと。
- ② 研究集団の中で研究方法や発表技術を学び、次年度の活動を独立して行えるように意識を高く持つこと。

3年生 論文執筆

【指導概要】

1・2年生で研究してきた内容を研究論文にまとめる。また1・2年生で学んだ知識や技術を活用し研究発表を行う。

【目標】

- ① これまでの経験を生かし、自らの研究を論文にまとめる。
- ② 論文にまとめた研究を発表する。

カリキュラムを支える体制

教員の分掌

校務分掌によって割り当てられている研究部自由研究係（以下 自由研究係）と、各学年の学年主任が兼務する自由研究係（以下 学年係）とが中心となって取組を進めている。図 2-4 のように、自由研究係が中心となって様々な情報を発信し、学年係と連携しながら取組を進めていく運営方法をとっている。これによって、年度初めに学年の状況に応じたガイダンス計画などの進捗計画を作成したり、テーマ決定用紙などの教材作成が行えるようになっている。また、学年別の「自由研究ガイダンス」は当該学年の学年主任が担当し、前年度の「自由研究」の取組の課題なども踏まえながら、「自由研究」に取組む心構えや目標を生徒とともに考えることで、生徒たちが「自由研究」に見通しを持ち、主体的に取組めるように工夫している。そして学年主任による「自由研究ガイダンス」を終えると、小集団によるゼミ指導が開始される。ゼミ指導開始後は、自由研究係が各ゼミに対して活動計画を提案し、各ゼミはそれに基づいて独自に活動を行う。

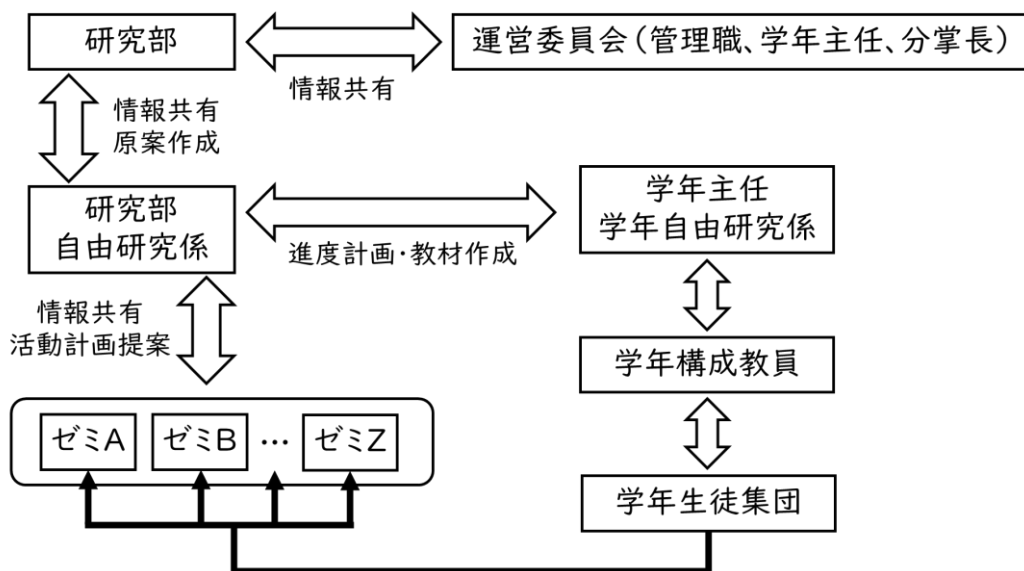


図 2-4 自由研究推進のための教員の分掌と相互関連 (2021 年度版)

ICT 環境

GIGA スクール構想の実現により、令和 3 年度中に生徒一人一台端末の機器環境整備が完了した。加えて本校では、コロナ休校を機に Google for Education (以下、G-Suite) を利用した Google Classroom の整備を進めていたので、自由研究においても各ゼミ単位の Classroom と

自由研究全体を統括する Classroom を開設した。各 Classroom の作成は、自由研究係が一括して行った。クラスルームの活用により、教員と生徒との連絡や課題のやり取りなども容易になった。

指導体制の修正

学級担任による指導を主としていた旧カリキュラムから、全教員によるゼミ形式の指導を行う新カリキュラムへの移行については、「取り組みのプロセス」で述べた。ここでは新カリキュラム移行後の指導体制の修正や追加について、その理由とともに述べる。

研究計画書や論文合格のためのチェックリストの新設

自由研究は通常の教科と異なる評価方法をとるが、3年生時の最終提出物である論文は附属高校天王寺校舎への連絡進学推薦判定基準として必須のものである。期日までの提出がされなかった場合、当該生徒の推薦は行われぬ。論文は、生徒の進路保証のために非常に重要な提出物である。

論文の執筆指導において当初は詳細な到達目標は示さず、提出期日と論文の構成およびページ数を示すだけであった。しかし自由研究に関するカリキュラム編集会議において、生徒の進路保証を確実にするため、生徒に対してより詳細な到達度の明確化と可視化が必要との意見が出された。これに対して、資料1に示す「論文執筆チェックリスト」が提案され、指導に使用することが決められた。この変更によって、ゼミ間の指導格差の解消や新任教員に対する指導のポイントの明確化といった効果が生じた。

専門家の招聘

新任教員や指導に不安がある教員に対しては、研究部の教員を中心に複数のゼミ活動を共同で行うことで、教員のスキルアップに努めている。また生徒も、他のゼミと共同で行うことにより、知的な刺激を受けている。さらに、より専門的な指導が必要な場合は、大学教員などに指導を依頼することもある。今年度は、NHK 交響楽団でヴァイオリニストとして活躍されていた稲垣琢磨教授に指導頂いた。今後は保護者の活用も考えていきたい。

=資料 1=

自由研究 74 期生論文執筆チェックリスト【教員用】

研究部 自由研究係

<必須目標>

- ・ B5 用紙6枚で作成できているか。(8枚であれば、よりよい。)
- ・ フォント(MSP 明朝), サイズ(11)で作成できているか。ドキュメントの場合は, 余白「上 1, 下 2, 右 3, 左 1mm」, 文字フォントは MSP 明朝で作成できているか。また英数字は, ゼミ担当教員の指示通りか。(ワードで作成する場合は, 38×39)
- ・ ファイル名には, 指示通り名前が付けられているか。(例. A40附中太郎「タイトル」)
- ・ 1 頁目のはじめに, 「タイトル」「名前」が中央揃えで書けているか。その作成は, 指示通りか。(「タイトル」の文字サイズは 20, 「名前」の文字サイズは 14 とする。)
- ・ タイトルは, どのような研究をしたのかがある程度わかるようなものになっているか。包括的なタイトルではなく, なるべく焦点をしばったものにさせる。
- ・ パラグラフ・ライティングが出来ているか。
「表紙」「抄録」「はじめに」「研究目的」「研究方法」「研究結果」「考察」「結論」「参考文献」などとなっているか。
- ・ 表現の仕方が工夫できているか。(「～である」調で統一されているか。)
- ・ 重要な資料や図表のみを使用できているか。
6 ページという限られたスペースの中で伝えるには, 無駄を省き, うまくまとめながら述べていく必要があるため, 焦点を絞って書かせる。そのために使用する資料や図表も十分に検討させる。
- ・ 「参考文献」が五十音順で書かれているか。(論文執筆で使用したものだけを書く。)
- ・ 誤字脱字はないか。

<努力目標>

- ・ 先行研究を絡めて問題提起が出来ているか。
「はじめに」等の序論で, 先行研究から何が明らかになっていて, 何が明らかになっていない, または議論の余地があるのかをわかりやすく記述し, 本研究の目的につなげられているか。簡潔に「はじめに」「目的」を書き, 特に本研究に関連する先行研究を「先行研究」という章を新たに立てることで記述するのも方法の一つである。
- ・ 全体を通して文章で書く努力が見られるか。(特に, 「研究方法」「研究結果」)
箇条書きで書く生徒が多いが, 列挙することが望ましい場合のみに留まらせる。あくまで, 論述をさせ, 読み通したときに読者が納得するような書き方にする必要がある。箇条書きでは, 例えば接続語などが省略され, 連続性が失われることで論の流れがつかみにくいことがある。
- ・ 「考察」は, 「研究結果」と「結論」を結ぶ橋渡しの役割があるため, 筋が通っているか十分に検討されているか。
研究した本人がどのようにその結論に至ったのかを明確にするために, 読者を上手に説得しながら結論に誘導するような考察を目指す。ここで上手に先行研究を用いればより説得力のある文章になることを意識させる。